

毎日歌壇

伊藤 一彦 選

新聞紙、絵本、原稿、辞書、日記――紙と
囲み我が家の炬燵 東京 水原 理郁

△評▽こたつの活躍する季節になった。こ
たつの周りに広げられているものを具体的に
に列挙して臨場感があり面白い。

頑なに病院行かぬ夫にはおでんの玉子入れ
ないの刑 兵庫 廣澤 真希

△評▽下の句のこのユーモア。夫の健康を
氣遣う気持ちが温かく伝わる一首。

ひと粒の月のしずくのイヤークラフあなたの魔
法わたしを守る 八幡市 田中 まこ

雨粒がスマホに落ちて醜態なゴシップニュー
スを虹色とする 東京 藤沢 静二

太陽の光を私と分け合って銀杏は秋に消印を
押す 宮崎 門田 藍子

名も知らぬ花として生きてみる時しあわせに
氣付くのかもしれず 四万十市 佐竹 紫円

あやまれば許されていた幼き日 鮎たっふり
の餅を食べてた 仙台市 小野寺寿子

犬オヤツの裏棚で売る大人オムツどちらも買
って急いで帰る 川崎市 栗林 尚美

表札に犬の名前も書いていた個人情報報するさ
くなくて 倉敷市 中路 修平

ニュース後に卒業証書を探しおり誰もわれに
は求めぬものを 久留米市 仲 雅則

米川千嘉子 選

ふと目が覚めると僕は自由だった 冬の日が
射すとき妻の部屋 高松市 島田 章平

△評▽朝の目覚めというよりは昼間ふと眠
ってしまっていたのか。亡き妻の部屋に満
ちる虚の氣配が連れてくる「自由」。

ひとつつつ果実落つるがにひつそりと友から
落下 友といふ人 伊丹市 岡本 信子

△評▽よく知っていたつもりで友の個性、
友らしさがいつしかうせてゆく寂しさ。

畑神を愛でて祝ひのおにぎりを広ぐ 小鳥の
言葉に埋もれ 福知山市 杉森 大介

静の字にも争ひはあり清らかな月夜の下の空
爆のこと 千葉市 芍 葉

ていねいな暮らしは我を追いつめて餌となり
たりグラノーラ食ふ 名古屋市 外山 雪

クルクルと回せばパカッと取り外し置いとけ
る乳房であればいいのに 広島市 堀 眞希

幸ひの手といふ名前の幸手市に暮らして古帯
リメイクしをり 幸手市 中村 早苗

麻痺の妻敗血症から戻りくる「不思議な身体」
とベテランの医師 狭山市 若松 吉弘

この鉢の花いつ咲くのとわれ尋ね夫婦喧嘩は
これでお仕舞ひ 吹田市 鈴木 基亮

働いてまた働いて働いて女性首相はキラリと
にらむ 丹波市 ぎんたろう

加藤 治郎 選

缶ビール片手にどこまでも歩く浅瀬にふたり
の影がゆれてる 名古屋市 森本 有

△評▽真夏の風景だ。缶ビールがいい。長
い砂浜である。ずっといつまでも青春が続
くような感じがする。恋が揺れている。

結婚観 金柑のなる近道であなは先に猫を
見つける 名古屋市 朝田おきる

△評▽コンカン・キンカンと音が響き渡
る。穏やかな日常のスケッチが続くのである。

ディッシャーですくったアイスのような月いまに誰
かがスプーンで朗す 名古屋市 屋 河

よく通る道路にバグが見つかった 通行人の
影がめくれた 川崎市 船山 登

かなしみも驟雨のように在りしとき濡れた
椿は赤を増しゆく 川崎市 新井 将

プラカード高く掲げる『メロンパン 焼きた
てこの先50メートル』大津市 世田 夏雪

添えられたにんじんあまき響くからほくも夜
景も「てにをは」が変 東京 石井 しい

交又する777のレシートに パン屋と私の
沈黙がある 神戸市 浅田 拓史

どこまでもふくらんでゆく自分だけひとつの
たしかな惑星として 東京 境 千尋

マナティブルー フルーツは空の色 泣きた
いときは泣いたらいいよ 広島市 木村 佳慧

水原 紫苑 選

もういいの解ったから、と細い細いゆびが壊
してゆく望遠鏡 東京 境 千尋

△評▽破壊を望む、わがままなこの声の主
は一体誰だろう。宇宙の中心に存在する少
女か。

渴望の美しさ超ゆる美しさ見せばや美容室の
鏡は 甲府市 村田 一広

△評▽「ばや」は自己の希望の助詞。鏡自
身の希望と読みたい。

眼球を硝子にかえて剝製は心を何に代えた
らうか 大阪 中村 杏

心臓は純銀の窓少女らのたましいのごと星は
光り 東京 山野ゆかり

夢にゐて夢だと気づいたしあきで小雨のなか
を歩いてかへる 見附市 有村 桔梗

何もかも忘れてしまふ陽だまりの中きみだけ
に降るイチヨウの葉 東京 遠野 鈴

今月もたまごを落とすまだ誰も昇っていない
螺旋階段 川崎市 二宮 珊瑚

秋祭り屋台に並ぶ鮎細工夜の光を透かしかが
やく 東京 野上 卓

白菊と黄菊の違いどちらにも晩はありて光
らぬ眼 町田市 古井 朔

六割が水の我々吸い尽くす都会のヒルは重い
スポンジ 熊本市 夏風かをる

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから
投稿できます